

# 英語科における指導の重点化に向けた 脳性まひ生徒の英語学習の実態と「育てたい力」の検討

「桐が丘L字構造」に基づく指導の具体化

高橋 佳菜子\*1 川間 健之介\*2 宇野 彰\*1,2  
(筑波大学附属桐が丘特別支援学校\*1) (筑波大学人間系\*2)

KEY WORDS: 英語学習, 脳性まひ, 系統的な指導

## 1. はじめに

我が国の英語教育は、グローバル化において子供たちに必要とされる資質・能力育成のため、2020年度には小学校中学年から外国語活動の導入や高学年における英語の教科化、中・高等学校においては、より目標・内容が高度化することが掲げられている(文部科学省, 2013)。

当校英語科では、脳性まひ生徒の視知覚認知の困難さに着目し、認知特性に応じた適切な手立て・配慮について検討してきた。肢体不自由の児童生徒に対する教科指導については、学力が着実に積み上がらないために、系統的・発展的な指導の展開に困難さがあり、そのためには、教科の系統に沿い、かつ個に応じて指導内容を精選・重点化することが重要である(成田, 2016)。

本研究では、次期学習指導要領に示されるような、グローバル社会に生きる当校児童生徒に求められる英語の学力とは何なのか、その系統性を明らかにし指導の重点化を図ることを目的とする。そのために、まずは脳性まひ生徒の英語学習の実態を把握し、当校英語科における「育てたい力」について検討することとした。

## 2. 脳性まひ生徒の英語学習の実態

当校中高英語科教員が英語学習上の特徴をカードに記し、そのカードを整理することで、学習上の特徴について把握し、優位点と困難点を整理することとした。

まず、優位点として「学習態度の熱心さ」「暗記、暗唱が得意」「聴覚優位であり、聞こえた音を再現する力が高いこと」「話すこと自体が好きであること」が挙げられた。

一方で困難点については、「見た文字を正確に書き写すこと」「聞いた音から綴りを想起すること」「文中の語を1語ずつのまとまりとしてとらえること」「三人称やbe動詞等の、日本語とは異なる英語独特の事象をとらえること」「具体的思考と抽象的思考を行き来させながら英文をとらえること(例:「She is a student.」を解釈する場合、「Sheは彼女という意味。文法上では主語。)」」等が挙げられた。これらの困難点は「チャンクの意識のしづらさ」「英語独自の事象の理解のしづらさ」「語句の配列を決めている文法規則の理解・運用の難しさ」の大きく3つにまとめることができた。上記のような難しさは、脳性まひに起因する視知覚認知や音韻認知の難しさ、同時処理の苦しさ等が背景となっており、英語科特有の苦しさにつながっているものと考えられた(Fig.1)。これらを整理すると、得意な面はあるものの、見えにくさ・とらえにくさ等によって、必ずしも情報を正確にとらえられているわけでないために学習として積み上がりにくく、そういった生徒は学ぶ充実感や楽しさも感じにくいことが推察された。

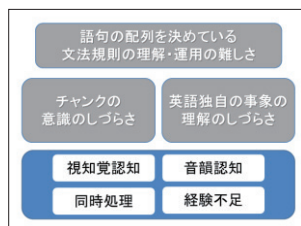


Fig.1 英語学習の困難点

## 3. 「育てたい力」の検討から見た、授業改善のポイント

次に現行学習指導要領と次期学習指導要領から、当校英語科の「育てたい力」について整理したところ、①クラスメイトやALT、来校する外国人などと、自分に関すること(日常生活、好きなこと、本国文化、将来など)を伝え合うことができる、②基本的な語彙・語法(言語材料)を理解し、運用できる・文章や会話文の概要を理解し、音読できる、③英語がわかる・できることへの充実感や英語を学ぶことの楽しさを覚え、主体的に英語学習を継続させることができる、が挙げられた。

言語材料を取り入れながら、言語活動を通して伝え合い、英語がわかる充実感や学ぶ楽しさを得ていくことで、主体的かつ自発的な学習者を目指していくイメージ(Fig.2)と、その中でも、学習指導要領に示される「言語材料」から「文法事項」、優位点である「話すこと」を軸に「聞くこと」「読むこと」「書くこと」を関連させて指導していくことについて共通理解した。



Fig.2 育てたい力

## 4. 今後の課題～系統的な指導のための、ルーブリック評価を活用した授業改善の試み～

「国際共通語としての英語力向上のための5つの提言と具体的施策(2011)」において、各中・高等学校が学習指導要領に基づき、生徒に求められる英語力を達成するための学習到達目標を「CAN-DOリスト」の形で具体的に設定することが示された。当校英語科では、「系統表」を当校のCAN-DOリストと位置づけて「文法事項」と「話すこと」に着眼して作成に取り組む。作成にあたっては、ルーブリック評価を活用している。ルーブリック評価導入において、以下の点が成果として挙げられる。

- ・どの場面で生徒のどのような姿を評価するかを明確にできたこと
- ・評価場面に至るまでの指導について振り返ることができたこと
- ・生徒と到達目標を共有しやすくなったこと
- ・英語科内の話題共有が容易になったこと

今後は、授業内で目標とする生徒の具体的な姿について検討しながら、教科としての系統性を整理していきたい。

## 5. 文献

文部科学省(2013) グローバル化に対応した英語教育改革実施計画。

成田美恵子(2016)「思考の仕方」を身に付けることに重点を置いた特別支援学校(肢体不自由)における教科指導の取組～国語科の指導を例に～. 季刊特別支援教育, 64, 24-27.

(TAKAHASHI Kanako, KAWAMA Kennnosuke, UNO Akira)